

# 看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の実態

桑村由美, 岸田佐智

徳島大学大学院医歯薬学研究部女性の健康支援看護学分野

## 1. はじめに

近年、口腔内の状態は、糖尿病や動脈硬化、誤嚥性肺炎、妊娠合併症などの全身疾患と関連することが明らかになってきている<sup>1)</sup>。また、がん治療においても医科歯科連携した口腔ケアが推進<sup>2)</sup>されており、看護師は、全身疾患との関連を見据えながら口腔ケアの知識や技術を習得し実践できること<sup>3)</sup>が求められている。そこで、私達は口腔ケアに関する教育方法を検討するために、看護大学生の臨地実習における口腔ケアの実践内容についての調査<sup>4)</sup>を2015年度より継続的に実施している。

本研究の目的は、大学における最終学年の4年次学生が臨地現場での最後の実習である看護統合実習終了時までには体験したと認識している口腔ケアの実態を明らかにすることである。

## 2. 方法

### 1) 対象

4年制大学での看護基礎教育課程にある学生で、4年間の総まとめの実習である看護統合実習を終えたA大学4年生81名を対象とした。

### 2) 調査方法

看護統合実習の終了後(2016年7月)に、自記式質問紙調査を実施した。本研究の目的を説明後、調査用紙を配布し、協力が得られる場合には、回収箱への投函を依頼した。

### 3) 調査項目

先の研究<sup>4)</sup>で独自に作成した質問紙を用いて、学生自身の口腔セルフケアの実施状況、現在の口腔内の状態と歯科受診・受療行動、口腔への興味・関心・知識、臨地実習での口腔ケアの実践内容と自己評価について尋ねた。なお、項目は、先行研究<sup>5)</sup>での医科歯科協働の専門家会議で考案した糖尿病患者の口腔保健行動支援のために必

要なアセスメント項目を参考に、臨地実習で体験する全ての領域の対象者の状況を想定して作成した。なお、口腔ケアには、観察・援助・教育の3種類の内容を含めることとした。

### 4) 分析方法

個人属性の基礎集計、各変数の記述統計量の算出を行った。解析ソフトはIMB SPSS 23.0 for Windowsを用いた。

### 5) 倫理的配慮

本研究への参加は自由意思とし、参加の有無により、学習や成績評価に何ら不利益を生じないこと、研究参加の同意は調査用紙の回収箱への投函をもって得たとすること、無記名で行い、集計結果は統計的に処理し、個人が特定されないように配慮すること等を口頭および文書で説明した。なお、本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号2329-1)。

## 3. 結果

### 1) 対象者の概要

分析対象者は、調査用紙を配布した81名のうち、同意が得られた61名であった(回収率75.3%)。女性が57名(97.4%)で、年齢は21.8±1.9歳(平均値±SD)であった。自身の口腔のセルフケアの実施状況は、口腔内の観察51名(83.6%)、歯間ブラシの利用14名(23%)、歯科用フロスの利用14名(23%)、歯1本ずつの丁寧な歯磨き37名(60.7%)、歯と歯茎の境目の歯磨き57名(93.4%)、歯ブラシの携帯17名(27.9%)であった。現在の口腔の状態は、歯の痛み6名(9.8%)、歯磨き時の出血31名(50.8%)、喫煙2名(3.3%)であった。

### 2) 学生が臨地実習で実践した口腔ケア

#### ①口腔ケアを実践した対象者の状態

運動機能に問題があり日常生活行動の一部分で援助を受けていた(40名)、術後・重篤な状態・

末期などのため日常生活のほとんどについて援助を受けていた(33名)、知識不足などのため教育的支援・指導が必要な状態であった(30名)、認知機能に問題があり日常生活行動の一部で援助を受けていた(25名)であった。

### ②指導のもと実施した口腔ケア

多かったものは順に、口腔内の観察 24名(39%)、歯ブラシを用いた歯磨き 20名(33%)、ブラシを用いた舌のケア 18名(30%)であった。少なかったものは順に、歯科医院等で歯磨き指導を受けた経験の有無を尋ねる 2名(3%)、自分の口臭への気がかりを尋ねる 2名(3%)、かかりつけ歯科医院の有無を尋ねる 3名(5%)であった。

### ③見学した口腔ケア

多かったものは順に、口腔内の観察 22名(36%)、ブラシを用いた舌のケア 22名(36%)、歯ブラシを用いた義歯の清掃 20名(33%)、少なかったものは順に、1年に1回の歯科受診の有無を尋ねる 2名(3%)、歯の総数を数える 4名(7%)、歯科医院等で歯磨き指導を受けた経験の有無を尋ねる 4名(7%)であった。

### ④実施も見学も行っていない口腔ケア

多かったものは順に、1年に1回の歯科受診の有無を尋ねる 55名(90%)、歯科医院等で歯磨き指導を受けた経験の有無を尋ねる 55名(90%)、自分の口臭への気がかりを尋ねる 54名(89%)、歯の総数を数える 53名(8%)、かかりつけ歯科医院の有無を尋ねる 53名(8%)であった。

### 3) 臨地実習での口腔ケアへの取り組み状況の自己評価

積極的 6名(9.8%)、やや積極的 24名(39%)、やや消極的 19名(31%)、消極的 11名(18%)、であった。

### 4. 考察

学生が体験した口腔ケアは、口腔内の観察、歯ブラシでの歯磨き、歯ブラシでの舌のケアが多く、これは昨年度の調査<sup>4)</sup>でも多かった項目であるが、指導のもとでの実施が減り、見学が増えていた。口腔ケアを実践した学生は、自分で口腔ケアを実施できない対象者の口腔の観察を行い、歯や舌のケアを実施するという一連の流れを体験で

きていたと推測される。しかし、歯の総数を観察したのは4名だけで、先の調査でも看護師の実施は少なかった<sup>5)</sup>。歯の総数は口腔の機能をアセスメントする基盤となり、全身と歯の関係を考える際にも貴重な情報となる。看護師対象の調査で歯科関連の知識習得の希望が多いこと<sup>6)</sup>が報告されている。このようなことから、看護基礎教育課程にある学生の教育においては、口腔の解剖生理学についての確実な知識を基盤に、対象者の発達過程や身体状況に応じた看護の視点での口腔ケアの基本を理解し、技術習得ができるように、教育方法を工夫する必要があると考察する。

### 5. 結論

臨地実習終了後の看護大学生の約30%が口腔ケアとして、口腔内の観察、歯ブラシでの歯磨きや舌のケアを実践したと認識していた。前年度とほぼ同様の結果であったが、指導のもとでの実施が減り、見学が増えていた。歯の総数は口腔機能の基盤となる情報であるが確認していたのは7%であった。学生が基盤となる知識を理解し、実施できるための教育方法の工夫の必要性が示唆された。

### 引用文献

- 1) 廣畑直子他：歯周病と全身疾患，日大医学雑誌，73（5），211-218，2014.
- 2) 厚労省：がん対策推進基本計画，p. 8，2012.
- 3) Johansson. I, et al: Oral Health Status of Older Adults in Sweden Receiving Elder Care, Nursing Research, 65(3), 215-223, 2016.
- 4) 林 希望他：看護学生の口腔ケアに対する認識と体験，第39回中国・四国精神保健学会，p. 102，2015.
- 5) Kuwamura. Y, et al: Development of the Diabetes Oral Health Assessment Tool for Nurses, Health, 7(12), 1710-1720, 2015.
- 6) 横塚あゆ子他：病棟看護師の口腔ケアに対する認識，老年歯学，27(2)，87 - 96，2012.